BLACK OR WHITE

ブラック オア ホワイト

浅田次郎

新潮社

ブラック
オア
ホワイト

BLACK OR WHITE

浅田次郎

新潮社

©Getty Images

二〇一五年二月二〇日　発行

著　者・浅田次郎

発行者・佐藤隆信

発行所・株式会社新潮社
郵便番号162―8711
東京都新宿区矢来町71
03（3266）編集部5411読者係5111
http://www.shinchosha.co.jp

印刷所・大日本印刷株式会社

製本所・加藤製本株式会社

ブラック オア ホワイト

価格はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Jiro Asada 2015, Printed in Japan
ISBN978-4-10-439405-0　C0093

ブラック オア ホワイト

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「レマン湖畔のジュネーヴかモントルーか、いや、もしかしたらチューリヒだったかもしれない。ともかく湖のほとりの、美しい町だったことはたしかだ」

都築君は古いワインの栓をていねいに開けながら言った。

「三十年近くも前の、浮かれ上がった時代の話さ。高級品なら何だって売れた。勤務地はロンドンだったんだが、オフィスにいたためしはなかったな。ヨーロッパ中を飛び回って、贅沢なもの、高級なものを片ッ端から買い漁っていた。そんな日々だったから、ジュネーヴかモントルーか、チューリヒだかもよくわからない」

私はてっきり、ワインの来歴を語るのだろうと思ったのだが、都築君は蘊蓄を傾けようとはしなかった。下戸の私に無理強いはせず、とっておきの逸品にちがいない古いワインをひとりで味わいながら、話の行方は知れなくなった。

「万年雪を頂いた山なみと青い湖。森に囲まれた中世そのままの町。だが、風光明媚というのも考えもので、いったん記憶の蔵に収めてしまえば、どこがどこだかわからなくなる。不幸には興味深い諸相があるけれど、幸福のかたちは画一的で面白くもおかしくもない。僕の心の中のスイスは、そういう国なんだ。たぶん君も同じ印象を持っているだろうから、ジュネーヴでもモント

ルーでもチューリヒでも、かまわないよな」
私は生返事をした。話の先はまるで見えない。
都築君の背うしろには、遥かなベイエリアまで光の粒が敷きつめられている。最上階のワンフロアを専有しているので、東京タワーもスカイツリーも見えるのだそうだ。
もともと都築君の生家は、この高台にあった。私も学生時代に何度か訪ねたことのある、貴顕の邸宅だった。父親はやはり商社マンだったが、祖父だか曾祖父だかがかつて南満洲鉄道の理事を務めた傑物だったと、聞いたことがあった。
そのお屋敷と引き換えに高層マンションのワンフロアを受け取ったのだろうが、むろん金額は釣り合わない。つまり、都築君は大金持ちになり、定年までの年月を相当に残して会社を辞めた。本人の口から聞いたわけではないが、友人たちの噂を綜合するとそうなる。
「近ごろ、よく眠れるかい」
話がジュネーヴだかチューリヒだかに飛ぶ前に、都築君はグラスを傾けながら訊ねた。
「――そりゃあよくないね。齢をとれば誰だって眠りは浅くなるし、睡眠時間も少なくてすむのはたしかだが、かかりつけの医者に言わせれば、そこが落とし穴らしい。疲労回復もストレス解消も、実は睡眠以外に効果のある方法はないらしいんだ。だから、若いころと同じ質の睡眠を確保しなければならない。摂生だの運動だのは、二の次でいい。十分に眠ってさえいれば、細胞は老化しにくいし、免疫力も低下しないんだ」
そう言いながら都築君は、テーブルの上に置かれたクリスタルのシガーケースを開けた。そこには煙草のかわりに、何種類もの薬のシートが入っていた。

私たちの世代は、眠り薬というものに本能的な忌避感を持っている。強い睡眠薬を医師の処方なしで買い求めることができた時代には、最も始末がよくて安楽な自殺の方法だと考えられていた。また、真昼間からその薬効によって酩酊する「睡眠薬遊び」が流行したのも、私たちの世代だった。

都築君は蠟細工を思わせる白く細い指先で、眠り薬を弄(もてあそ)んだ。

「それぞれがとても個性的なんだ。ストン、と落ちるタイプ。ごく自然に朝まで持続するタイプ。これなんかは、冬眠してたんじゃないかと思うくらい、ぐっすりと眠れる。その日の体調や翌日の予定を考えて、使い分けるんだ」

ふと、都築君にのっぴきならぬあやうさを感じた。

室内には家族の気配が感じられない。私が訪れてから二十分や三十分は経つだろうに、誰が出てくるでもなかった。リビングルームは空虚なくらい広く、清潔すぎた。

ひとりなのか、と私は訊ねた。

「気楽なものさ」

質問はあまりに漠然としており、都築君の返事も答えになってはいなかった。それ以上の質問をすれば、言わでものことを言わせてしまうような気がして、私は口を噤(つぐ)んだ。

豊かな髪はさすがに白くなったが、身にまとった超然たる空気は変わっていない。痩せて背の高い体型も、昔のままである。洒脱に着こなした麻のシャツとジーンズは、とうていやもめ暮らしには見えなかった。

「あのころは、毎晩ぐっすりと眠れた」

眠り薬を弄びながら、都築君はいくらか悔悟するような口ぶりで言った。
話の舳先は唐突に回頭した。三十年近くも前の、好景気に浮かれ上がっていた時代の出来事である。
まったく、学生時代とどこも変わっていない。いつも超然としていて、相手の立場や気持ちをこれっぽっちも忖度しないのだが、そうした彼のふるまいには邪気や功利がかけらも窺えなかったから、疎んじられることもなかった。「都築君」という呼び方は、彼に対する敬意などではなく、それ自体が渾名だった。
いや、もしかしたら、階級社会を脱しきれぬ曖昧な民主主義の中で育った私たちは、知らず知らず彼を貴族として礼遇していたのかもしれない。
ソファに沈みこみ、広い壁に不釣合なくらい小さいマティスに目を向けて、都築君は勝手に語り始めた。
「そう。あのころは、どこでもいつでも、ぐっすりと眠れた」
それから、長い脚を組みかえ、「むろん、誰とでも」と言って、優雅な笑い方をした。

第一夜　スイスの湖畔で見た白い夢

そのホテルは、いわゆるベル・エポックの典型だった。
ヨーロッパでは珍しくもないが、何から何まで百年前のまま、という頑固さが気に入った。
廊下もゲストルームもむやみに広くて、近代的な改良は何ひとつ施されていなかった。だからかえって、三十代なかばの生意気ざかりの僕でも、不満の抱きようがなかったんだ。
バルコニーには真赤なゼラニウムが咲き誇っていて、レマン湖だかチューリヒ湖だかが手に取るように望まれた。湖岸は秋の色に染まっていたと思う。
十九世紀の末か二十世紀初めの一瞬の平和な時代に、贅の限りを尽くして造られた代物だったのだろう。機能的にも美術的にも完成しているから改良の必要はないと、信じられているふうがあった。
たとえば、ゲストルームに金庫が見当たらない。そんなものを設置するほどいいかげんなホテルではない、というわけだ。
真鍮をぴかぴかに磨き上げた電話機はあるが、外線を使おうとすると交換手が出た。むろん英語も通じた。

冷蔵庫もない。飲み物が欲しいときは、ルーム・サービスなどではなく、いちいちボタンを押して執事(バトラー)を呼ぶんだ。早朝だろうが夜中だろうが、一分と待たずにドアがノックされた。

それがまた、テール・コートにボウ・タイを締め、白い口髭を立てた、まったく十九世紀にしかいるはずのないバトラーだった。何を注文しようと、彼は「かしこまりました」の一言で去り、僕の思い通りのものが、必ず彼自身の手で届けられた。

ホテルに到着した晩のことだ。

ゲストルームの広さと、やたら曲線を多用したデザインになじめず、なかなか寝付けなかった。輾転(てんてん)とするうちに、どうにも羽根枕の柔らかさが気になってきた。

そこで、バトラーを呼んだ。硬い枕がほしい、と僕は注文した。

「かしこまりました」

テール・コートの裾をさっと翻して彼は出て行った。そして僕が煙草を喫(す)いおえぬうちに、たちまち戻ってきた。

ライオンの装飾が施された大理石のワゴンの上に、枕が二つ載っている。どうしたわけか、それぞれに黒と白のカバーがかかっていた。

バトラーは魔術師のように両手を拡げて、ひどいドイツなまりの、それでいて厳かな英語で言った。

「ブラック・オア・ホワイト?」

どうしてそんなことを訊くのだろうと思った。たかが枕なのだから、両方とも置いて行けばよ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

さそうなものだ。だがバトラーは、まるでメイン・ディッシュでも選ばせるようにそう言った。

触れてみると、やはり柔らかな羽根枕だった。もっと硬い枕はないのか、と僕は訊ねた。

格式あるホテルでは「ノー」が禁句だ。バトラーは微笑みながら答えた。

「どうぞお試し下さいませ。ブラック・オア・ホワイト？」

意味がわからなかった。何かしら僕の知らない慣習のようなものがあるのか、それとも東洋人のわがままを肚に据えかねて、いやがらせでもしているのか、と思った。

あれこれ考えても始まらないので、「ホワイト」と答えた。古今東西、枕カバーは白が当たり前だろう。

バトラーは満足げに、しかし謙虚さは失わずに肯き、白い枕をベッドに据えると、黒い枕を載せたままのワゴンを押して部屋から出て行った。ドアのところで右手を胸に当て、「グッド・ナイト・サー」とドイツなまりの英語で言った。

その「グッド・ナイト」が、単なる夜の挨拶ではないと、僕はたちまち知ることになった。灯りを消してベッドに横たわったとたん、それこそ薬でも呷ったと思えるくらい急激に睡気がやってきたんだ。

白い枕は、飛行場の空を覆った厚い雲みたいだった。僕の乗った飛行機が、すっぽりとその中に吸いこまれてしばらく揺れ、やがてひといろの白から抜け出すと、思いがけない地平が目の前に展けた。

そう。実に「グッド・ナイト」さ。

もしや君は、ここまでの僕の話がすべて夢物語だと思っているんじゃないかね。
三十年近くも昔の出来事だから、記憶はいささか曖昧だけれど、まさか夢と現を取りちがえたりはしないよ。ここから先が夢の話になる。
他人の夢など面白くもおかしくもなかろうが、まあ聞いてくれ。白い枕の底に展けた、別世界の話さ。
見知らぬ街の、霧に被われた橋の上に僕は佇んでいた。川はとても広くて、どちらの岸も見えなかった。河口近くであるらしく、霧の彼方に貨物船の舷灯が浮かんでいた。ときどき霧笛が聞こえた。
僕のかたわらには恋人がいた。誰というわけではないが、僕の恋人だった。僕らは狂おしいくらいに愛し合っていた。
逃避行の末に、二人はその街を訪れた。当時の僕はまだ独身だったから、不倫の果てというわけではない。もっと古典的な理由――たとえば、ロメオとジュリエットのような禁断の愛の結果、僕らはその霧の港町まで逃げてきたのだった。
「死のうか」と僕は言った。恋人はマフラーで被った口から白い溜息を吐きながら、力なく肯いた。橋の下には海と川の水が、くろぐろと渦巻いていた。
その女は、かつて僕が愛した誰かしらではなかった。好きな女優でもなし、ほかの誰に似ているわけでもない。では、茫洋としたイメージなのかというと、それがまたきっぱりとした像を結んでいるんだ。
色白の小作りな顔で、髪は耳を隠すくらいの長さで、唇がルージュをさしたばかりのように赤

かった。もし僕に絵心があるのなら、今でもそっくりに描き出せるだろう。

僕らは固く抱き合い、死の接吻をかわした。そしてそのまま、欄干から身を投げようとした。これは夢だ、などとは思っていなかった。二人の愛を阻もうとする悪意から逃れる唯一の手だては、心中しかないんだ。天国で結ばれるかどうかは知らないが、少くとも客観的には愛の成就にちがいないと、僕は考えた。

そのとき、たちこめる霧の先に光が見えたかと思うと、橋を揺るがして路面電車が走ってきた。

「早まるな、逃げろ、逃げろ！」

乗降口の手すりにぶら下がった男が、片手をぐるぐると振り回してそう叫んだ。電車は霧を巻いて走り去った。

勇気づけられた僕は、恋人を抱えるようにして駆け出した。橋は果てもなく長く、足元は水びたしだった。

「無理だわ。あなたひとりで逃げて。私は連れ戻されるだけだけれど、あなたは殺されてしまう」

息を切らしながら恋人は言った。僕はにべもなく叱りつけた。

「今さら何を言うんだ。君と別れて生きるくらいなら、殺されたほうがましさ」

追手は迫っていた。霧の向こうで足音が乱れ、「いたぞ」「逃がすな」などという声も聞こえた。僕らは懸命に逃げた。

するとふいに、何発もの銃声が轟いた。僕は立ち止まって屈みこみ、恋人を胸にくるみこんだ。路面電車が戻ってきた。

「乗れ！」
男が叫んだ。その手には拳銃が握られていた。彼は僕らを励ましたばかりか、追手を片付けて戻ってきてくれたのだった。そこで僕らは、サンフランシスコのケーブルカーさながらに、走っている電車に飛び乗った。
「腰掛けていなさい。人ごみの中は安全だ」
車内には僕らとよく似た風体の恋人たちが何組も乗っていた。男性は重そうな黒いコートにソフト帽を冠り、女性はギャバジンのコートの襟を立ててマフラーを口元まで巻いていた。まるで大勢の影武者みたいに、僕らと同じ格好をしていた。みな何事もなかったかのように、愛を語り合ったり肩を寄せて眠っていたり、新聞を拡げて覗きこんだりしていた。
男は僕らを人目からかばうように、両手で吊革を掴んで立っていた。
「あなたは誰ですか」
と僕は訊ねた。
「忘れてしまったかね」
男は少し悲しげな顔をした。そこで僕は、写真でしか知らぬ祖父だと気付いた。
南満洲鉄道の理事を務めたあと、戦後は商社員に転身して、僕がまだ物心つかぬうちにニューヨークで客死した祖父だ。遺された何枚かの写真は、家族と共に写っているときでさえ、栄光の時代を背負った傑物の威厳を失ってはいなかった。
ただし、僕は祖父の人生や人となりをほとんど知らない。苦学して帝国大学を出たというからには、わが家の財産は祖父が一代で築き上げたにちがいないのだが、その遺業を語らうことは禁

忌とされていた。

満鉄理事という一時代の権威そのものが、他聞をはばかるのだろうか。あるいは何かしら不正な蓄財でもしたのだろうか。いや、もしかしたら、ニューヨークでの突然の死には、孫に伝えることのできぬ怖ろしい謀略か、屈辱的な事情があったのかもしれない。調べればわかるのだろうが、幼いころから禁忌とされていたことだから、とうていそんな気にはなれなかった。

祖父はぼんやりとともる車内灯を光背に負って、僕を見おろしていた。

「私の力ではここまでだよ。あとは君たちでどうにかなさい」

祖父は僕の手に拳銃を握らせた。それから寒そうにコートの襟を立て、ソフト帽の庇(ひさし)を垢抜けたしぐさでつまんで、電車から降りてしまった。

入れ替わりに、追手の一味らしい黒ずくめの男たちが飛び乗ってきた。僕はコートの内懐に拳銃を握ったまま、帽子で顔を隠して恋人に口づけをした。もし面が割れたなら撃つつもりだった。

「日本人はいねえか」と、どすの利いた声がした。乗客たちは一斉に「ノー」と答えた。僕らも唇を重ねたまま、「ノー」と言った。

ふと、祖父はこんなふうに、ニューヨークの地下鉄の中でギャングに撃ち殺されたのではなかろうかと思った。色恋沙汰のあげくに。

享年は五十いくつかの若さだったし、写真で見る限り、背が高くて日本人ばなれのしたなかなかのハンサムだ。マンハッタンで浮名を流してもふしぎはあるまい。

「いねえようだな」

追手の男は伝法な英語で言い、電車から降りた。男たちに続いて、お揃いの身なりをした乗客

もみな降りてしまった。
どうやらそこは終点らしかった。人々のあとからおそるおそる、煉瓦の壁に囲まれた袋小路に降り立った。小さな夜空には雲が低く流れており、足元からはスチーム暖房の蒸気が吹き出していた。
僕と恋人は路地から路地へと伝い歩いた。あちこちの壁に、僕と恋人の写真が貼ってあった。懸賞金は十万ドルだ。
そうと知れば、街なかをうろうろ逃げ回るわけにもいかない。それに、僕らはくたびれ果て、腹をすかしていた。
人がようやくすれちがえるくらい細い路地の奥に、陽気なディキシーランド・ジャズの溢れ出る酒場があった。赤いネオン管で書かれた店の名は「幸運な夜（ラッキー・ナイツ）」だった。
人ごみの中は安全だ、と祖父が言っていたことを思い出した。僕らの咽（のど）は干からびており、腹の虫は鳴いており、ましてや「ラッキー・ナイツ」ならば、その店に入らぬ手はなかろう。
僕らはコートの襟で顔を隠し、酔っ払いでごった返した酒場に入ると、カウンターの端の止まり木に腰を据えた。
「おいおい、マジかよ。十万ドルの札束が天から降ってきやがったぜ。まったくラッキー・ナイツだ」
カウンターに腰をもたせかけて、二百ポンドの上はありそうな大男がげらげらと笑った。ウェスタン・ハットを冠り、タトゥーを入れた素肌に革のベストを着た、伝統的なろくでなしだった。
黒人のバーテンダーが、バドワイザーを瓶ごと僕らの前に置いて言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com